

6 日、鎌倉・九条の会が 10 周年を記念して「憲法のつどい 2015 鎌倉」を『今こそ日本国憲法』というテーマで「鎌倉芸術館大ホール」で 1,500 人以上の参加者を集めて行われた。鎌倉・九条の会は井上ひさし氏、なだいなだ氏、内橋克人氏などの著名人が中心になって立ち上げた会で、精力的に活動を展開してきた。今回も立ち見まで出るほど盛会であった。

同志社大学大学院ビジネス研究科教授の浜矩子氏が『グローバル時代の救世主、それが日本国憲法～正義と平和が出会う時～』と題して講演された。「アベノミクス」は「アホノミクス」で、皆がそう言うようになることを願っていると、会場の笑いを誘うことから話し始めた。浜氏はカトリック信者で、詩編 85 編 11 節の「慈しみとまことは出会い／正義と平和は口づけし」の言葉から話された。正義ばかりを主張するとイスラエルとパレスチナの戦い、また「イスラム国」のように独善的になってしまう。正義と平和が口づけしなければならない。また、包摂性と多様性が出会うことが大切である。慈しみとまこと、正義と平和、包摂性と多様性が出会っているのが九条で、九条こそが開かれたグローバル時代の救世主である。安倍首相は「取り戻したい病」に罹っている。強い日本、強い経済、誇りある日本を取り戻したい、かつての奪い取る大日本帝国に回帰したがっている。そのために国民は国家に奉仕せよと言っている。安倍首相が言う「平和」という言葉は全て「戦争」に置き換えると理解できる。九条を真に生かすために人の言葉を聞く耳を持ち、人の悲しみに涙する目を持ち、人の苦難に差し伸べる手を持たなければならないと結ばれた。

NPO 法人国際地政学研究所理事長の柳澤協二氏が『集団的自衛権はなぜ間違っているか』と題して講演された。柳澤氏は防衛研究所所長、歴代内閣の官房副長官補（安全保障）を歴任し、イラクの自衛隊派遣を監督した人である。内閣の中枢にいた柳澤氏は「集団的自衛権」は間違っていると、安倍政権に反対を表明している。それは、歴代内閣の解釈と違うから、批判せざるをえないと語り始めた。進めようとしている集団的自衛権は歯止めなく、米軍の指揮下に巻き込まれ、拒否できない。グローバル化した世界では戦争はできない。互いが損をし、傷つくだけである。日本は台頭している中国にコンプレックスを感じ、米国追従に走っているが、培ってきた「平和ブランド」を活用して、和平への活動に専念すべきである。イラク戦争に自衛隊の 1 万人が派遣されたが、帰国後、29 名が自殺した。直接戦闘はしなかったが、自衛隊員にかかったストレスが大きかった事実を述べた。

経済評論家の内橋克人氏は『これは民主主義ではない！～強者の欲望に寄り添う権力のもとで～』と題して講演された。権力者の公的資源の私物化があると、三つの M を指摘された。第一の M は「マネー」である。公的資金を投入して株価を押し上げているが、作られた金融操作である。「アベノミクス」は浜氏が言うように「アホノミクス」である。第二の M は「メディア」である。最近の報道は権力に媚びた「忖度報道」になっている。ジャーナリストが官邸に招かれ会食しているようでは、メディアの自立はない。第三の M は「マインド」である。権力の頂点に同調するように巧みにコントロールをしている。上目遣いでは平和は実現しない。私たちは「花を引き抜くことはできるが、春の到来を止めることはできない」という言葉信じたい。春とは「生存条件」を確保できる状態である。米国主導の TPP が導入されると日本の農業は潰され、外国からの食料輸入に依存している日本はますます苦境に陥る。安全保障の基礎は食料の確保であると、語気を強めて力説された。九条を堅持することが日本と世界の平和に寄与すると改めて思わされた。